

日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2015年度 助成者)

作成日 2015年10月26日

氏名 (フリガナ)	藤澤 典子 (フジサワ ノリコ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2015年10月11日(日)～10月17日(土)
所属機関名 身分	医療法人徳洲会 松原徳洲会病院 看護部長

今回の日米医学医療交流財団の助成をいただき、このプログラムに参加させていただきました。

到着当日は日本から一緒に行った13名の仲間と、留学臨床体験を地元ポートランドで働いている日本人看護師の方からアメリカでの看護学校の仕組みや日本との違い、看護師の権限や病院のサポート体制などのお話を聞きました。日本ではオンラインで看護師の資格を取ることもできなければ働きながら学位をとりに行ける環境もないように思います。業務も日本の看護師のように看護全般ではなく、メディカルアシスタントがバイタルサインや血糖測定などを行ない、看護師はケアアセスメントを行うなど業務の切り分けをしていることに驚きました。大学をでて看護学校を卒業し看護師としてのスキルを磨きながら学士や修士を取り地位を確立していました。2日目以降の病院見学では看護師たちの自信に満ちた対応と自由な服装・装飾品や各診療科にセラピストやボランティアなどのサポート体制が整っていました。マグネットホスピタル認可の病院では、その取り組みと患者様に質の高いケアを提供するための全データをとり証明し、どのような取り組みをして改善したのかを具体的に報告しているそうです。また、この認可を継続していくために個々の能力はもちろんの事、病院としても患者様・看護師の満足度も上げ活性化していかななくてはならず、看護師の満足度を上げるために学士や修士号をとるためのサポート体制や給料保障など看護職の満足度を高めることで看護の回復率に影響するだけではなく、患者が満足することで医師や他の職種も満足が高まりその波及効果は大きいとされている。そんな人気のある病院は看護師の採用の際、病院での雇い入れではなくユニット(病棟)ごとに雇い入れを行ない看護師長が面接し、後日スタッフと面接し実際の現場の状況などを聞いたり、看護師長がユニットの予算を組みやりくりしていることなど各分野で独立し個々が責任を持った働き方をしていると感じました。残業に関しても時間内で終われないのはおかしいと師長がバックアップ体制をとり、忙しいユニットにはフロートユニットから応援を出してもらい残業のないユニットづくりをしています。在院日数に関して、開胸手術をされた患者さんが5日で退院する一方で、無保険の患者様が重症化して救急で運ばれるケースも少なくないといった話もお聞きすることが出来ました。その他、チャイルドライフスペシャリストやセラピードッグのお話で印象的だったのが、「子供だって真実を知りたい」という言葉でした。子供は大人が思うより賢く同じ目線で話をしてくれる人がいることでその子が大人になっても精神的な自立に繋がると教えてもらいました。また、尊厳死に関わるレクチャーでもいろいろなカウンセリングを受けたうえで選択肢であり、尊厳死を選んだからといって薬を処方してもらい、いつでも死ねる安心感から命を絶つ人が少ない現状にも驚きでした。

シュミレーションセンターではバイタルサインなどをコントロールできる部屋があり人形を使って本番同然の研修を行い、現場に出た時には即戦力としてのアセスメント能力や行動力が養われたり、病院での希望を聞いてシミュレーション研修を行ったりと現場にも本人にも良いシステムがあると思いました。

全体を通して、アメリカの研修を終え、日本の看護師のスキルの問題や病院としての体制、バックアップの問題などを考えさせられました。スタッフを生き生き働かせることで患者様への質の向上につながっていることを実感することが出来ました。当院でも、組織的な職場環境づくりやリーダーとなる管理職の在り方、個々が責任を持って働けるような環境を作って行きたいと思います。今回、この研修にお声をかけていただいた徳洲会本部の遊佐常務理事や助成を支援していただいている方々、日米医学医療交流財団の関係者の方々そして共に学び情報交換できた仲間にお礼を申し上げ研修報告といたします。